

令和7年度【2025年度】とうきょう すくわくプログラム活動報告書

園名	荒川区立西尾久みどり保育園
----	---------------

1. 活動のテーマ

<テーマ>

見つけた！これなあに？～植物を通して自然を身近に感じる～

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

西尾久みどり保育園の特色である、園庭、緑道等自然豊かな環境を生かしながら、身近な自然に親しみ、探究心が育む取り組みをしていく。

2. 活動スケジュール

【探究活動の実践、記録】

夏：栽培物の成長を見守りながら、収穫の喜びを知り、植物への興味を深める。

秋：戸外活動を通して様々な自然物を発見したり、触れてみる。

冬：集めた自然物で遊んだり、調べる。

植物の観察や収穫に至るまで記録をドキュメンテーションで作成する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

【探究活動の実践、記録】

屋外の環境整備（収穫時に使用する手袋、収穫した物を調べるモニター付き顕微鏡、記録するカメラ。）

屋内の環境整備（図鑑、調べた事を共有する為の模造紙、写真用紙、マジック。観察による表現ができるコーナーの設置。）

4. 活動の内容

夏：植物を観察をする中で出た子どもの声や、調べた事を壁新聞にする。

秋：植物を観察をする中で出た子どもの声や、調べた事を壁新聞にする。秋の自然物（どんぐり、落ち葉）を使用して遊ぶ。

冬：植物の観察（冬の自然現象も含む）。観察をする中で調べた事を発表する。

事例名 「落ち葉、みつけた…落ち葉であそぼう！」

令和7年12月2日

対象児：1歳児クラス

西尾久みどり保育園

◎実際に見られた子どもの姿

- ・散歩や園庭遊びの際に、落ち葉を見つけ、子どもたちと拾って楽しんでいた。
- ・保育者が拾った落ち葉を袋に入れておくと、子どもたちも拾った落ち葉を持って来て、袋に入れていた。



- ・袋に集めた落ち葉を折り畳みプールに入れ、落ち葉のプールを作ると、プールの中に入って、落ち葉の“カサカサ”という感触を味わったり、手に持った落ち葉たちを投げて、落ち葉が舞う様子を楽しむ。
- ・プールに敷き詰められた落ち葉の上に寝転がったり、寝ているところに保育者が落ち葉をかけて、全身で落ち葉の感触を味わう。



- ・風に吹かれて落ち葉が木から落ちる様子を見て、「あそこからくるんだね」と、落ち葉の仕組みを発見する姿もあった。

○援助の工夫 ●保育者の思い

○戸外遊びの際に、落ちていた葉っぱを拾って見せたり、色の違いなどを言葉にして、子どもたちも落ち葉を手にしてみたいくなるよう働きかけた。

●子どもたちが拾って見せてくれた落ち葉を集めてみたり、落ち葉をより身近に感じてほしい。落ち葉を遊びに使ってみよう。

○透明の袋に落ち葉を集めたことで、落ち葉が入っていることやどれくらい落ち葉が集まったかを子どもたちにも見えるようにした。

●子どもたちとたくさん落ち葉を集められたので、一人一人ではなく、みんなで楽しめる遊びや、全身で落ち葉に触れる機会を作りたい。

○折り畳み式プールの下にクッション材を敷き、子どもが寝転がった時や万が一転倒した際に安全なようにした。

●1歳児の子どもながらに、落ち葉がどこから来るのかに気が付いて、言葉にして教えてくれたことから、遊びを通して、落ち葉に対して興味を持ったことが伝わってきた。

◎実践後の振り返り

- ・落ち葉のプールで遊んでいると、異年齢児も一緒になって遊び、落ち葉のプールを通して交流を深められた。プールの大きさは今回の落ち葉の量に見合っていたが、人数が集まってくると、もっと大きいプールを用意したらよかった点や、落ち葉を集める際に異年齢児の子どもにも声をかけたら、より多くの落ち葉が集められたのではないかと感じた。

☆PT 内での協議・意見交換

- ・落ち葉のプールで遊んでいるのを見て、自然に異年齢の交流ができた。
- ・他のクラスでの落ち葉をつかった遊びの情報を共有し合った。砂場での遊びに落ち葉を使っていたり、帽子に落ち葉を貼って飾りにしてみたりと、様々な遊びに落ち葉を使っている魅力的である。

事例名 「どんぐり拾い～これなあに？～」		
令和7年11月	対象児：2歳児クラス	西尾久みどり保育園
<p>◎実際に見られた子どもの姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たくさんのどんぐりを見つけて喜ぶ姿が見られた。 ・事前に持参していたビニール袋に見つけたどんぐりを入れてみた。 ・「せんせー、みて」「これまるいね」「このどんぐり、ちょっとここがくろいよ」「こんなにたくさんあったよ」等と自分が発見したことや子ども達なりに気づいたことを保育士に伝える姿が見られた。 ・A君は保育士が拾ったどんぐりを目をまん丸にさせてじっと見つめる。保育士がA君の手のひらにどんぐりをのせると、ちょっとびっくりしたようにどんぐりを下に落とす。コロコロ転がるどんぐりをそのままじっと見ている。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	<p>○援助の工夫 ●保育者の思い</p> <ul style="list-style-type: none"> ○散歩時に事前に一人一袋ビニール袋を用意した。 ●子ども自身が自分で『見つけた！』という満足感を味わえるようにしていった。 ○子ども達のつぶやきに対し「すごいね」「ほんとだ。これは少し丸いね」などと応答的に応えていくようにした。 ●子どもたちなりに見つけたことや気づいたことを保育士に伝えてほしい。それを一緒に共有することで自然に触れることを楽しんでほしい。 ○自分からなかなか拾いに行く姿が見られなかったA君に対し、保育士が自然物との間に入って触れる機会を持つようにした。下に落としたA君に対し、その後は無理に触れるのではなくA君の姿を見て様子を見守った。 ●触れることはなくとも、A君なりにどんぐりに興味を持ち始めているのだと感じた。今後は目に入る機会を増やして触れる機会を増やしていきたいと思った。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	
<p>◎実践後の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育園のすぐ目の前に緑道があり、そこにどんぐりがたくさん落ちていることから自然とどんぐりに触れる機会が持てるのが本園ならではのと感じた。今回はどんぐり拾いをメインに行なったが、今後はどんぐり拾いからマラカス作りや園庭でのごっこ遊びに繋げていけるように環境設定を行なっていきたい。また、どんぐりの保管方法も考慮していかなければならないと感じた。 		
<p>☆PT 内での協議・意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんぐりを身近に触れ合える機会が持てるのは環境に恵まれているので、今後もその特徴を生かしていきたい。 ・どんぐり以外にも園庭や緑道を含め、自然物に触れる機会を子ども達が自発的に出来るように保育士が環境を整えていきたい。 		

事例名 集まれ☆みんなの「みつけた」 (掲示)

令和7年9月～

対象児：3歳児

西尾久みどり保育園

◎実際に見られた子どもの姿

◎9月2日

- ・「せんせい！みつけたよ！」と園庭で遊んでいる時の発見したどんぐりを見せてくれる男児。
「(ふると) コロコロするんだよ。
むしがいるのかな。たまごみたい。」
→虫を想像して絵を描く。(カミキリムシ・幼虫)

2日後

- ・「みどりいろだったけど、今はちやいろだ！！」
- ・「どうしてだろうね。」と保育者が尋ねると、
「あさになって、よるになって、いろが変わるんだよ。どんぐりにもいのちがあるんだよ」と話していた。

◎9月19日

- ・「なにかのたねかな？」「すぐつぶれちゃう…」
「ぶによぶによぶよしてるから『ぶによぶによまん』だ～！」

次の週、同じ場所で同じものを発見。

- ・「かたまってるよ！」「だんごむしみたい」
「かたくなったらつよくなるんじゃない？」
「つよくなったらおとなになるってこと？」

◎11月

- ・園庭の草花を拾った男児が「これ、水をいれたらいろがでるんじゃない？」その姿をみて他児も同じようにやり始める。
- ・午睡前に、クラスみんなで共有する。どうやって作ったのを発表してもらおう。
「もみもみしたらいろがかわってきた」
「たくさん(草)入れるといろがこくなる」
- ・その後、「これ(色水)にあれ(だんごむしのウンチ)を入れてみたい。」→「ぶらあっくになった！」



○援助の工夫 ●保育者の思い

- ・子どもの発見を共有し、気づきを肯定していくようにした。また、男児のイメージが広がっていくように、どんな虫なのかを尋ねたり、線を描いてみたりしてみた。
- ・一つの発見からどんどんイメージを広げていく様子に驚き、他児にも伝わるようにしたいと思った。お皿に乗せてクラスの机に置いたり、掲示に書き込み他児の目にふれるようにした。

- ・子どもの発想と一緒に楽しみながら、子どもの言葉を丁寧にひろっていくことにした。
- ・手で触ったりにおいを嗅いでみるようにして、五感でそのものを感じられるように促した。

- ・年長児の姿を思い出しやりたいと思った三歳児。色がなかなか出なかったので、「もみもみ、すりすり」という言葉でやり方を伝える。色が出始め色の変化を発見し伝える姿から、記録を取り始める。色が分かりやすいように白い画用紙を用意し比べられるようにした。



- ・ひとりひとりの色水がちがうことに気づき、どうやって作ったのか、それでどう思ったのか、を丁寧に聞いていきクラスで共有した。

◎実践後の振り返り

発見と一緒に楽しみながら、発見から広がっていくイメージや思いを丁寧に聞き取るようにした。その中で、思いが伝わる喜びを感じることができたのではないかと感じた。

また、ひとり一人の発見の共有を意識して、記録を取ったり掲示を作成したりした。子どもたちが自分たちで振り返ることができたり、友達の発見に触れる機会となったのではないかと感じた。

☆PT 内での協議・意見交換

廊下に掲示したことで、他クラスの発見を知ることができ、興味を持った子どもは自分から他クラスの友達に関わりに行く姿が見られた。

事例名「園庭で見つけた葉っぱたち」

令和7年5月～11月

対象児 4歳児

西尾久みどり保育園

◎実際に見られた子どもの姿

5月

・プランターに植えたピーマンに毎日水をあげて大切に育てている。ある日ピーマンの脇から芽(雑草)が出ているのに気づく。芽に対し「これなんだろう?もしかして、ピーマンかな?」と不思議そうに見つめている。保育者に図鑑で調べることを提案され「いいね!」と意欲的に調べ始める。しばらく探して図鑑に同じような葉っぱを見つけ、クラス中に「これとおなじみみたい」と教えていた。友達から「そうなんだ～」と反応をもらっている。



11月

・散歩先で大きな葉っぱ(カエデ)を見つけ集めた。「やきいもするから、ひをつけよう」と言って遊びに取り入れる。大きな葉っぱを見つめ「これ、なんてはっぱだろう?」と不思議そうにしている。園に葉っぱを持ち帰りお土産にしていた。その後の室内遊びで図鑑を見て「これ(カエデ)あったよね」と思い出す場面があった。



・数日後、緑道に落ちていたドングリを見つける。「もっとドングリほしいな、どこにあるかな?」と保育者に聞く。数人で図鑑を持って探し、「コナラって木みたい」と話し合う子どもたち。次の散歩ではコナラを探そうとクラス中に知らせていた。



・その後、散歩中や散歩先にてドングリを見つけようとコナラの木や葉っぱを探す。コナラのような木や葉っぱを見つけ、その周辺にドングリが落ちていないか熱心に見つけようとする姿があった。また園庭や散歩に行き、葉っぱや実が落ちてると拾ったり、保育者に知らせたりする姿が見られた。

○援助の工夫 ●保育者の思い

●芽の形が全く違うのでピーマンではなく雑草だと思ったが、ピーマンと同じプランターから出てきたのでピーマンだと感じる子どもに面白さを感じた。どうして違うのか?探してみることで興味関心が高まると思った。
○子どもの発見や不思議に共感しながら、図鑑で調べてみることを提案する。芽と図鑑の特徴や違いを保育者と確認してみる。(形、葉脈の色、大きさ等)

○葉っぱに興味、関心が高いので子どもの声を拾いながら周りの友達とつぶやきを共有したり自然物に触れたり、遊びに繋がったりするようにした。

●自然物で遊ぶ姿を微笑ましく思いながら、葉っぱを使った遊びが続くといいと感じ「保育園にもあるかな?」と声をかける。

○葉っぱを見て不思議そうにしている子に対し、どの木から落ちてきたのか問いかけて探してみる。また、興味を持って欲しいと思い、カエデと知らせると驚いた表情だった。

○保育者はコナラというドングリだと知っていたが、自分で気づくといいなと思い「なんて言う木にあるか、どんな葉っぱの木が分かれば探せるかな?」と問いかけてみる。ドングリと葉っぱの形がどのような物か確認し、答えへのヒントを出してみる。

・ドングリ以外の葉っぱや実といった自然物を探したり、遊びに取り入れたりする姿が増えている。

◎実践後の振り返り

葉っぱの名前が正確に分からなくても調べたい時に図鑑を提供できた。また、子どもなりに「これだ!」と思い友達に知らせる姿に影響を受けて、秋には落ち葉やドングリ等、「これなあに?」と興味、関心、不思議に感じる姿があった。子どもの自然に発生した興味、関心を拾い友達や保育者に繋げた。

☆PT 内での協議・意見交換

子どもの知りたい!を実現するために保育者が色々環境を整えたが、うまく分からないことがあった。分からなかったがその後も続く自然物へのアプローチとして、よい経験となって子どもたちなりの学びや継続に繋がったと感じた。

事例名「朝顔の色水あそび」

令和7年9月～

対象児5歳児

西尾久みどり保育園

◎実際に見られた子どもの姿

9月5日

- ・咲いていた朝顔の花が落ちているのに気づいていた子が花を集め始まる。
- ・保育士が「水を入れてみる？」と砂場のコップに水を入れてつぶしてみるが色がわからない。
- ・たらししてみると色が出るので、「なんでかな？」と問いかけると、砂場の器の色で分かりにくいことに気づく。
- ・ビニール袋を渡され、色水を作る。きれいな色が見て嬉しそうな顔で「みて～」と見せに来る。



- ・違う色の花をつぶして色の違いを発見。楽しんで3色作る。
- ・3色を見比べて楽しんでいると3歳児が興味を示し、一緒に作り出す。
- ・5歳児は色水でのジュース屋さんを始める。そこへ1歳児のお客さんが来る。
- ・5歳児は1週間ほど色水あそびが続いた。
- ・その後3歳児が葉っぱやカブトムシのフンなどをつぶし、色を観察してあそびに繋がっていった。



○援助の工夫 ●保育者の思い

- ・朝顔の種を植え芽がでて花が咲く様子、花の色が何色もあることなど、日々の水やりを通して観察し、子ども達と共有してきた。
- 9月になり園庭遊びができるように、花が落ちているのに気づき集めたが、それをどうするかを見守っていたところ、手に色がついたことを発見し保育士に伝えにきた。
- 「水を入れたらどうなるのかな？」と投げ掛ける。
- 子ども達が器に色がついるからわからないことに気づいたので、ビニール袋に入れることを提案した。はじめからビニール袋を渡してもよかったが、子ども達が考えて行動してほしいだったので、見守った。器の色が邪魔することに気づけてよかった。
- ・色水ができたので、違う色の花もあったよね。と伝える。
- ・3歳児にも作ってあげるように働きかける。
- ・咲いている花としぼんで落ちそうな花をつぶして観察させる。→咲いている花を取らなくなった。遊びがどう展開するか見守る。
- ・ごっこ遊びをはじめたことでさらに異年齢とのやり取りが増え嬉しくなった。

◎実践後の振り返り

- ・花を使った色水あそびはやりたいと思っていたが、子ども達から行動し始めうまく遊びへと繋げることができたと思う。入れるものによって、色の見え方の違いに気づいたり、花の色で様々な色になることが発見できた。そこからごっこ遊びに自然とつながることができてよかった。

☆PT 内での協議・意見交換

- ・子ども達同士の関わりの中から、色水あそびをすることができた。
- また1歳児とのごっこ遊びや5歳児の色水あそびがきっかけから3歳児の遊びにも繋がり、日ごろから異年齢交流を続けているため、遊びが各クラスにつながることもできたのだと今後も遊びを広げる工夫をしていきたいと意見がでた。